

TIJ 日本語教育研究会通信

No.63 2017.10.7 発行

発行：TIJ日本語教育研究会事務局
東京都葛飾区新小岩1-17-10
Tel:03(5607)4100 /Fax:03(5607)4102
E-mail tij@tij.ne.jp
TIJ ホームページ <http://www.tij.ne.jp>



10月に入り、秋の気配が感じられる今日このごろです。

設立 26 年目の 2017 年度、T I J 学生の多国籍化はますます進んでいます。今年 4 月からは、初めてブータンから学生を受け入れ、現在学生の国籍が 15 か国になりました。学生に基礎日本語力を身につけさせるため、昨年から「漢字マラソン」と称して、学生に毎月 1 回「漢字マラソンテスト」を受けさせ、徐々に上のレベルに進ませるといふ学習システムを始めました。また、今年から「語彙マラソン」を始め、毎月 2 回受験チャンスを与えています。さらに、初中級学生の会話力を伸ばすために以前開発した会話教材「はじめよう日本語初中級」を、非漢字圏学生にも合うように改訂しました。

今年も夏休みに開催された日本語学校教育研究大会に TIJ から 8 名の教師が参加し、新しい視点や考え方に触れてきました。そのご報告を本号に掲載させていただきます。また帝京大学生が TIJ のクラスでプレゼンテーションをしてくださいましたので、そこで得たことを報告させていただきます。

【本号の内容】

1. 2017 年度日本語学校教育研究大会参加報告
2. 帝京大学生プレゼンテーションから得たこと
3. 実習コース修了レポート
4. 大学生の教育実習修了レポート
5. お知らせ

2017年日本語学校教育研究大会参加報告

基調講演「日本語教育推進基本法と日本語学校教育」を受けて

今年も日本語教育振興協会主催の日本語学校教育研究大会が8月7日、8日に開催されました。今年 of 日本語学校教育研究大会の1日目の基調講演は元文部科学大臣中川正春氏による「日本語教育推進基本法と日本語学校教育」というものでした。

昨年度、中川氏の呼びかけで超党派議員による「日本語教育推進議員連盟」が結成され、「日本語教育振興基本法」(仮称)制定を目指して、現在までに8回ほど関係各機関と議論を重ねてきていらっしやるということです。

「日本語教育推進議員連盟」の結成の大まかな趣旨は以下です。
少子高齢化が進んでいる日本で、産業を支えてくれる外国人が増えています、その人たちが社会に溶け込むのに必要な日本語教育には、現在まだ法令上の規定がありません。グローバル化が進む中、各国が自国語を世界に広める努力を重ねている一方、日本語教育は、制度的にも政策的にも、まだその基盤がさえできていないのが現状です。日本語は日本文化の原点であるとともに、経済活力を引き出す大切なツールでもあります。

*「日本語教育推進議員連盟」結成に向けての案内文より抜粋

現在までに各機関から寄せられた意見をまとめた報告書が配布されました。(ここでは項目のみ掲載)

- 一 日本語教育機関について
 - 1 位置づけ
 - 2 教育水準の質の維持向上について
 - 3 支援について

- 二 日本語教育人材について
 - 1 地位の確立について
 - 2 待遇改善・就労機会の確保等について
 - 3 養成及び確保について
 - 4 研修について

- 三 所轄官庁について
- 四 その他

「日本語教育振興基本法」(仮称)ができると何が変わるかというと

- ① 基本的な理念や方向性が規定される
- ② 監督官庁が決定する
- ③ 監督官庁による基本計画がつくられる

④ 個別法に向けた体制が整う

* 日本語教育情報プラットフォーム事務局阿久津大輔氏の報告より

— 基調講演と同日午後行われたパネルセッションに参加して感じたこと —

今まで日本語教育は多くの部分が民間に任されてきました。「日本語教育振興基本法」がどんなものになるかはまだ不明ですが、国の法律で制度化されることは、日本語教育に関わっている私たちにとっても大きな一歩と言えます。日本語教師の地位が確立され、待遇が改善されれば、それは喜ばしいことです。法が制度化されると、責務の明確化、教育の質の向上が要求されると思いますが、それは今まで私たちが追求してきたことでもあります。そこに国の財政的な支援がついてきて、いい形で実現されるといいと思います。但し、その中で、各日本語学校は今まで以上に独自色を出す努力を続ける必要があると感じました。

広瀬万里子(T I J)

分科会「日本語学校のための著作権講座-権利を侵害しない、されないために-」

8日の分科会「日本語学校のための著作権講座-権利を侵害しない、されないために-」(株式会社テイクオーバー 知財アナリスト 我妻潤子氏)に参加いたしましたので、ご報告いたします。

この分科会は申し込み時のアンケートへの回答が必須であり、また事前のビデオ視聴が前提という反転授業形式で行われました。事前アンケートは「著作物とは何か説明できるか」といった質問に答えるものでした。またビデオは3つ(①「著作物とは何か」②「著作者は誰か」③「著作権とはどのような権利なのか」)視聴し、課題も行いました。まず、これらのビデオのポイントを挙げます。

《ビデオの内容》

① 「著作物とは何か」: 思想または感情を創作的に表現したものであって、文芸、学術、美術、音楽に属するものをいう。

* 作った人がプロかアマか、また、年齢も関係ない。どんな素材かも関係なし。

* 著作物の種類: 1 言語、2 音楽、3 舞踊・無言劇、4 美術、5 建築、6 地図・図形、7 映画、8 写真、9 プログラム の著作物

(事前の課題で上記の1~9のものを具体的に挙げるようにということでしたので、考えていきましたが、分科会では時間がなかったのか、課題については触れませんでした。)

* 共同著作物: 例) インタビュー、編集著作物: 例) 雑誌の記事

* 二次的著作物: 翻訳、編曲、変形、翻案(映画化)し作成したもの

* 著作物ではないもの:

1 思想、感情がないと思われるもの…データ、事実、公式、定義

2 創作的でないもの…機械が撮った写真、ありふれた表現

3 表現したと思われぬもの…レシピ（単純な作り方の場合）

4 文芸・学術、美術、音楽に属さないもの…大量生産された工業用品

②「著作者とは」：著作物を創作する者をいう。

*「著作者」と「著作権者」はイコールではない。

*「著作者」は複製権、上映権、公衆送信権を譲渡できる。

例) 映画会社＝著作権者 映画監督＝著作者

*職務著作：会社などの発意に基づくもの、業務に従事するものが職務上作成する場合など

*「著作者人格権」：著作者しか持てない権利で、譲渡できない。

1 公表権、2 氏名表示権、3 同一性保持権

③「著作権の種類」：

*「著作物」の1 有形的複製…複製、2 提示…上演・演奏など、3 提供…頒布、譲渡など、「二次的著作物」の4 作成…翻訳、編曲など、5 利用

例) 有形的複製…勝手に印刷、写真、複写、模写、録音、録画などの方法によって複製されない権利

例) 提示…1 上演及び演奏権：勝手に公に上演・演奏されない権利

2 上映権：勝手に上映されない権利

3 公衆送信権：勝手に自動公衆送信（インターネット配信）されたりしない権利

*公衆の定義：不特定の少数（一人でも）・多数、特定の人であっても多くの人が対象となる場合は「公衆」となる。「特定された少数」のみ「非公衆」。

*著作財産権：

例) 翻訳・翻案権：著作物を著作者以外の者が勝手に翻訳・編曲・変形・脚色・映画化などすることを禁止する権利

原作のコミックからテレビドラマ、DVD ボックス、シナリオブックを作成する場合は原作者の許諾が必要となる。

《8日の分科会》以下のことが行われました。

① ビデオに関する小テスト：「新聞の見出しは著作物か」「新幹線の写真の著作者は誰か」「取引先でのプレゼン資料の著作者は誰か」など

② ①の答え合わせ：著作物、著作者、職務著作、複製権についての確認

③ 著作権法 35 条についての説明：教育機関での複製に関するものだが、日本語学校はこの教育機関には含まれず、35 条は適用されないため権利処理が必要となる。

*「引用」より「権利処理」のほうが安全で楽である。

*新聞記事の許諾方法

例) 毎日新聞の場合は「毎日フォトバンク」から申請書が入手できる。

許諾 NG はほとんどなし。

④ ワークショップ 1：著作物の許諾交渉を体験する

ドラマ「逃げ恥」の「恋ダンス」を動画サイト You Tube にのせるという設定。

*利用者、権利者のグループに分かれ、条件を考える。

1 どのような使い方 (目的)、2 発信範囲、3 有期か (どのぐらい?) 無期か、4 クレジットをつけるか否か、5 無料か有料か (いくらぐらい?)

*利用者、権利者のグループの代表がどのような交渉になったか発表する。

- ⑤ ワークショップ 2 : 自分が作成した教材のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを考え、グループごとに発表する。

* クリエイティブ・コモンズ・ライセンス : 「表示」「非営利」「改変禁止」「継承」の 4 つのマークを組み合わせたもので、自分の作った教材を他の人にどう扱ってほしいか提示できる。

「表示」…クレジットの表示

「非営利」…営利目的で使わない

「改変禁止」…作品を改変しない

「継承」…元の作品と同じ組み合わせの CC ライセンスでの公開

- ⑥ 事後アンケート…事前アンケートと同じ内容だったと思います。が、分科会で触れなかった内容 (保護期間についてなど) もあり、答えにくいものもありました。

感想 : 今回「著作物」について利用者、権利者両方の視点で考えることの大切さは分かりました。しかし、ワークショップの許諾交渉に関しては、それぞれのグループ発表に対して講師のコメントはあったものの、正解なるもの (ケースバイケースということなのでしょう) が示されなかったのが、単なるロールプレイに終わってしまった感が否めません。

ワークショップ 2 の CC ライセンスに関してですが、このような考えが浸透していけば、作成した人の権利が守られつつ、教材等の共有が柔軟になっていくのかなとは思いましたが、私自身はここでまた 35 条の問題が引っ掛かり、もやもやしたものが残ってしまいました。グループ発表では教材によって違うという意見も多く、具体的な教材それぞれについてどのような提示が望ましいのか、いくつか例を示してもらえたらよかったなと思いました。個別に色々と違ってくるので難しいのですが。

教材使用の許諾など、著作権を侵害しないために検討すべきことは何か、授業だけでなく、イベントに関しても、著作権の心配などをせずに楽しく行うためにはどうすればいいのかなど、まだまだ課題が多いと改めて感じた分科会でした。

佐々木真佐子 (T I J)

分科会「新しい教師研修のあり方を考える」

2部構成で行われた掲題分科会についてご報告します。

第1部 教師 Can-do リストを利用した教師研修事例 水信渉（拓殖大学大学院博士課程）

日本語学習者の増加→日本語学校の増加→日本語教員の確保の急務という流れに伴い日本語教育の質の確保が課題となっている背景がある。この中で青山国際教育学院の新人教師研修の取り組みは以下の通りである。

- ・専任講師と新人教員の1対1の授業研修
- ・外部講師による授業練習会
- ・教師版 Can-do リストを利用した自己分析や自律性についての研修
- ・評価（自己評価、指導員による評価、学生による評価）

教案指導の後で練習をするというのが、新人教師には安心感につながるといった。一方で評価については学生によっては大変厳しい評価があり、これを自分の成長の糧として冷静に受け止めることができるか、指導員のフォローがかなり必要であろうと思われた。

第2部 日本語教師のライフステージにもとづいて教師 Can-do リストを考える（ワークショップ）

①就任時から2年以内の初任教师、②3年程度の新任教师、③7年ほど経過した中堅教師、④10年以上のベテラン教師というライフステージ毎に「専門性」（教育目的の理解・実践力など）、「社会性」（対人関係調整力など）、「自己教育力」（問題発見・解決能力など）、「教育的人間力」（自己理解、他者理解・受容など）の観点から求められる教師の能力をリストアップするという作業を行った。

教師としてのライフステージの違う他校の先生方と作業を共にして理解を共有できたことがよかった。TIJでも教師全員でこのような作業を行うと、意識が高まり、各自のキャリアプランに役立つのではと思う。また、より協力して仕事に取り組めるようになるのではないと思う。

最後に、研究大会の研修委員会委員長で、コミュニケーション学院の奥田純子学院長から印象的な総括があり、特に次の2点について考えさせられた。

一つは、昔と違って教師は「指導できる人」というより「学習をサポートできる人」という役割になってきている。学習者の自律性を引き出すにはどのような能力が必要かを考えていかなければいけない。

もう一つは、ベテランの教師は積み上げた教師経験がベテランとして通用しない部分のあるICT世代、AI革命世代の学習者、新しい教師を相手にしていることを自覚すべき。

以上、大変勉強になりました。

阿字地道代（T I J）

分科会「地域との連携とその方法」

目的：現在スマホで母国の人と簡単に連絡を取ることができることもあり、日本にいても、ほとんど日本語を話さなくても生活できる環境にある。本分科会では、日本語をアウトプットする機会として、学校ができる「地域」での交流を深めていけるような支援を提案する。

Q:どのようにアウトプットする機会を生み出すのか。

Q:どのように地域コミュニティの一員になっていくのか。

Q:地域との関わりを授業化する方法(課外活動ではなく、カリキュラムに組み込む)

Q:地域コミュニティとの関わりを継続する方法・注意点

※学校周辺には日本語話者がたくさんいるという環境を生かしきれていないのではないか。

〈事例1〉 京都日本語教育センター京都日本語学校

・2003年から地域の小学校と連携している(京都市教育委員会を通して知り合う)

★小学校と日本語学校との方向性を一致させることが重要

小学校	国際理解、多文化共生、食育、文化芸術
日本語学校	日本語を間違える機会(学校の外で日本語をアウトプットする機会)

★活動内容

レベル：初級後半から中級クラス

相互のカリキュラムに組み込む

小学校：総合学習(京野菜・世界遺産などをプレゼン)

日本語学校：プレゼンテーション(国・文化など)

★現状

- ・カリキュラム内では難しく、課外活動になってしまうのが現状
- ・通常コース→短期コースのプログラムに入れる。

★今後の課題

- ・通常コースでのカリキュラムの再開
- ・ICTの活用(インターネットを使用することによる無駄の削減)

継続理由	継続しない理由
<ul style="list-style-type: none"> ・頻繁に行き来をする。 ・積極的に顔を売る。(地域でのイベントなどに参加) ・目的の共有 	<ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム(カリキュラムに組み込む場合は、通常の勉強に支障が出る／インプット・アウトプットのバランス) ・教師の意識 ・学生の目的の変化 ・人事異動

〈事例2〉新宿日本語学校

- ・ホームステイ：北海道洞爺湖・沖縄など
- ・ボランティア：就学前児童検診の通訳、小学校英語ボランティア
- ・地域交流：祭礼参加・盆踊り練習

〈授業化〉上級3(NS6レベルのクラスで実施)

SNSなどを用いて高田馬場を広める→故郷の家族や友達に対して

※プロジェクトの企画書は教師が作成「こんな街で学んでいます」

日程

オリエンテーション	5月22日	ベスト5の選定	5月29日～6月2日
事前リサーチ	5月22日～23日	リハーサル	6月5日
タウンウォッチング	5月24日～25日	発表	6月6日

★教師が準備すべきこと

- ・ゲスト審査員への依頼
- ・案内状の作成
- ・採点表などの準備
- ・賞の準備
- ・教室・設備の準備

連携のポイント

- ・目的の明確化(学生に理解してもらう)
- ・下準備をきちんとする
- ・日頃からの地域との交流(あいさつ、ゴミ出しなども含めた)

— 感じたこと・感想 —

どの学校もどのように地域との関係を築いていけばよいか模索している印象だった。しかし、多くの学校でさまざまな取り組みを行っている。それに比べると、TIJは地域との連携が少ないのではないかと感じた。現在は公立の学校でも外国人児童が多いこともあり、国際理解や異文化理解ができる機会を求めている学校も多いので、教育委員会などを通して、地域の小学校・中学校などとの連携を検討してもいいのではないかと感じた。

また、地域連携をカリキュラムに組み込むことについては、時間的に難しいと思った。京都日本語学校でも現状は課外活動というかたちになっているので、課外活動という形式で行うのがより現実的だと感じた。

篠原典久 (T I J)

日本語学校で新卒を採用するために

日本語を学ぶ大学生・院生と日本語教員の意見交換会Ⅱに参加しました。今後のために参考になると思いますので、報告いたします。

1. 現状

日本語教育を専攻した大学生・大学院生が就職先として日本語学校を選ぶことは極めてまれである。

理由として考えられること：

日本語学校とはどのようなところか知らない

ほかの業種と比べて待遇が不透明

給料が安いなど待遇面を含め悪いイメージが先行している、そのため親も反対する
新卒向けの求人がない

日本語学校に同世代の先輩がいないので情報が得られない

⇒日本語学校の将来のために業界全体で若い人材を育てよう！

各学校が就職先として選ばれる学校になることを目指そう！

2. 武蔵野大学日本語教員養成課程担当村澤慶昭先生より日本語学校にやってもらいたいこと

① 単位型インターンシップの受け入れ

② 就職説明会の実施

③ 共同研究・勉強会の開催

(以上をやってもらえる学校は直接連絡してくださいとのこと)

3. インターン制度を設けている事例

A. 愛知国際学院 昨年12月～今年7月

① 週一回授業見学 8回

② 週一回教案を立てて授業見学 4回

③ その後、週一回教案作成および模擬授業(10～20分)

B. 横浜デザイン学院

① 国際交流ボランティアとして登録してもらい、無償で学生の会話の相手や宿題のチェックをもらう(2か月)

② TAとして教案を立てて授業に参加および補習授業の担当(半年間)

③ 準専任として1年契約で採用

4. 日本語学校としてできると思うこと

①HPに採用のページ(欄)を設け、いっしょに働きませんかと呼びかける

②新卒向けインターン制度の導入

市川さゆり(T I J)

自由研究発表について

2日目の自由研究発表について、簡単にご報告いたします。

(1)「字形の認知に着目した初級用漢字補助教材『チョコっとかんじ(チョコかん)』の開発と実践」(カイ日本語スクールの吉田先生、松尾先生、野口先生)

- ・カイ日本語スクールの漢字学習で以前から使用していたテキスト「KANJI LOOK AND LEARN」の補助教材として開発
- ・「チョコかん」は、1回分が10分程度で漢字を「ちょこっとずつ」学べるアプリ教材である(まだ学外者は使用できない、学生は一人一台持っているiPadで学習)。

以下の3レベルで構成される。

- ①1レベル:字形中心「字形はどこを見ればいいのかく簡単ルール」→直線と曲線、トメ・ハネ・ハライ、字形のバランス、線の長さや終わり方の変化に着目させる
- ②2レベル:構造中心「漢字はパーツの組み合わせでできている」→漢字をパーツに分解、再生できるようにする
- ③3レベル:音符中心「漢字の音符がわかると読み方がわかる」→漢字の音をあらわす部分を提示、読みを助ける

⇒アプリ自体は発売されていないが、この手法はT I Jでも活用できそう。パーツごと(きへんやしんにょうなど)のマグネットを作って、張り替えたりしてパーツを意識させる?

(2)「非漢字圏向け中級学習ストラテジーー漢字圏向けとの違いー」(清風情報工科学院日本語科の平岡先生、ATOWAの宮岡先生)

・「音」を聞き、漢字や意味と結び付け、頭の中で漢字仮名交じり文がイメージできるようにする。発表の教授法は主に以下の2つ

- ①N2これだけ漢字:ベトナム母語話者向けに制作した漢字語彙の習得ドリル。漢字の音訓を覚える「単漢字版」と、熟語の読みを覚える「熟語版」がある。

→漢字に、漢越音とベトナム固有語による読みを併記したシート(60字×20シート)で、読みをまず自宅で暗記し、学校ではテスト(点数はつけない)、自己採点をする。

- ②聞いて書く読解:課題文を音読→ディクテーション→チェック、きれいに書くを繰り返す、最終的にきれいな漢字仮名交じり文が書けるまで繰り返していく活動

→教師の音読時には、単語や音節を「おとのかたまり」として意識させる。

それが書く際にも意識できるようになる

⇒課題文を受験に関する漢字を含むもの(進路、専門学校など)にし、読解、書き、願書書きの練習を兼ねることができる?

(3)「進学後に必要な日本語力とはー進学前後の留学生に対する調査からの一考察ー」(名古屋福德日本語学院の立澤先生)

- ・日本語学校に在籍する学生（中～上級）と、進学した卒業生を対象に、「進学後に必要な日本語能力」についての意識調査を実施
 - 進学後、進学前に想像していた以上に「口頭で伝える」「日本人の言っていることを理解する」「漢字や難しい語彙を理解する」場面で日本語能力が必要との回答
 - 「自己表現をする（意見を言う、お願いをする）」について、進学前は意識が低く、進学後により日本語能力が必要と感じる。進学前の留学生に対して自己表現の必要性を意識させることが必要

金子結衣（T I J）

ポスター発表

新宿日本語学校が行ったポスター発表「インターネットを使用したプレースメントテストの妥当性と課題」を聞いてきましたので、そのご報告をします。

TIJ でも毎回入学式後のプレースメントテストの採点とその後のクラス分けを最小限の時間で行っており、クラス分けの妥当性が問題になっていました。このポスター発表の目的が「新入生に行うプレースメントテストにかかる人員を削減するため」と書かれていたので、TIJ での導入を考えに入れて話を伺いました。

WEB プレースメントの実施時期： 入学希望者のビザが入局監理局から下りた時点

テスト形式： 選択式 これだけでは日本語運用能力は測れないので、来日後、短文作成問題と面接を行う

使用ソフト： Google フォーム 自動採点

懸念事項：

- ① 受験者のパソコン環境の有無
- ② 本人受験かどうか確認できないこと
- ③ 時間制限が設定できないこと

実施手順：

- ① 入学希望者へ「WEB テストの手順」メールを送信
- ② メール内リンクから「日本語レベル対応表」の WEB サイトへ行き、希望レベルを選ぶ
- ③ 希望レベルのテストを受験する
- ④ 受験者は結果をプリントアウトして、プレースメントテスト当日に持参する

妥当性： WEB テストと従来の筆記試験テストの両方を受験してもらい、二つのテストの整合性を見る
二つのテストで受験レベルと合否が一致したのは 63%

結果： 受験者データが少ないとはいえ、テストの整合性が 60%では妥当性があるとは言えない

WEB テストに加えて、作文や面接も行うのでかえって手間がかかる結果となった

今後の課題：

- ① WEB テスト受験の周知
- ② 受験までの手順の簡素化
- ③ 出題形式の見直し
- ④ 上級以上レベルの追加
- ⑤ WEB テストの妥当性の確認
- ⑥ 無料公開テストの導入の検討
- ⑦ 時間・人員削減につながったかの検証

所見：

毎回入学時に TIJ 作成のプレースメントテストをおこなっていますが、選択式ではなく、活用変化を書かせたり読解問題があったりして、このようなテスト形式に慣れていない学生は点が取れない傾向がありました。

採点に時間がかかる割には、適正なクラス分けができていないという苦情も出ていたので改善したいと思っていました。

テスト当日の採点の時間と負担が軽減されるだけでも、教師の心理に及ぼす影響は大きいと思います。

入学当日のテストは作文と面接を行えば日本語運用力も測れますし、たとえ WEB テストを本人が受けなかったとしても、それほど問題はないと思います。

現在、就職プログラムで入学前の WEB テストを行っていますが、それを活用できないかと考えた次第です。

北内直子 (T I J)

帝京大学生プレゼンテーションから得たこと

TIJ の学生にとって、同年代の日本人と話す機会、友達を作る機会は得難いものです。昨年縁あって帝京大学の森吉弘先生のゼミ（通称 森ゼミ）の皆さんと交流する機会に恵まれ、今年も TIJ を訪問してくれました。森ゼミにはいくつかの作業班があり、そのひとつにベトナム班があります。毎年ハノイでインターンシップに参加しながら、日本に興味がある人々に日本紹介のプレゼンテーションを行うという活動をしています。ハノイでの本番の前に TIJ で腕試しのプレゼンテーションを披露して下さったので、そのご報告をいたします。

今回の TIJ プレゼンに際してゼミ生たちからの要望は、なるべく日本語がわからないベトナムの学生に向けて発表したいというものでした。日本をあまり知らない、日本語も通じないベトナム人に日本の大学生活を伝えたいというのが、ベトナム班の目的です。そこで、TIJ の対象は今年4月に入学した学生に決め、入学時からある程度日本語が通じる人たちから、全くのゼロからスタートの人たちまで、日本語レベルに差がある4つのクラスで行うことにしました。

当日、ベトナム班のメンバーは11人、4班に分かれ、日本の大学生がどのような学生生活を送っているかについて、動画を中心に通学、大学での過ごし方、サークル活動、アルバイトに分けて紹介してくれました。

もともとこの発表はTIJの留学生対象に作ったものではありませんから、すでに日本の生活を始めている学生にとって、それが「興味をもって知りたいこと」であったとは言えないかもしれません。でも、同年代の大学生たちと交流できる機会に、全員目を輝かせて参加していました。

森ゼミベトナム班のTIJでの発表はゼミ生たちにリハーサルを提供する、という位置づけで始まりましたが、やってもらって分かったことは、実は私のほうが得るものが多かったということです。教師としての日常で当たり前になっていた、でも本当にそれでいいのかという多くの事に気づかされました。以下に3点にまとめてみました。

まず、言葉のコントロールについてです。私たち日本語教師は日頃から学生のレベルに合わせて使う言葉をコントロールして話しています。それが学生の理解のためと思って、習い性になっていますが、そのことが学生たちの聞く力を伸ばすことに貢献していないかもしれないと、ゼミ生のプレゼンを聞きながら思いました。学生たちがよく口にする「先生たちの日本語は全部わかるのに、外の日本人の話は分からない」という状況がまさに目の前に展開していたのです。例えば、日本人が人前で発表するときを使う言葉、「発表させていただきます」「ご紹介させていただきます」の「させていただきます」形が一番よく聞くわからない表現でしょう。また、「通学」「学食」「賃金」等の漢語も初級の学生にとっては初めて聞く言葉だったに違いありません。学生が「今」わかる言葉で話す、というのは親切なようでいてそうではなかったのです。

次にショックだったのは、学生の「わかります」にもレベル差があるということです。今回発表対象のクラスの一つに、ベトナム人が大多数でとてもよく勉強するクラスがあります。彼らは日頃から予習復習を欠かさず、必死に授業に食らいついてわからないところを解明していく意欲的な学生たちです。このクラスは発表を聞いたとき、「多くの言葉がわからない」と言いました。一方、4月入学時にゼロから始め、日本語上達が少しゆっくりのクラスがあります。そのクラスでは、発表を聞いた学生は「ほとんどわかった」と言ったのです。ゆっくりクラスの学生にゼミ生の日本語が通じたとはとても思えません。彼らは日本語はわからなくても、動画はわかった。そこで、「わかった」と言ったのです。授業で「わからない」ことに慣れていると、すこしわかっただけで満足してしまう。それを見過ごしていたことに気がきました。

3番目は、私たち教師の介入の弊害です。ゼミ生たちの発表は、この時点でまだ改善の余地が多々あるものでした。しかし、午前の発表が終わった時、私たちは多くの「ダメ出し」をしてしまいました。学生の反応の薄さに不安を感じていたゼミ生たちは、私たちのダメ出しを聞き、急遽やり方を変えて午後の発表に臨みました。午前に比べて日本語の説明を大幅に省いて、ほぼ動画を視聴する内容に変更してしまったのです。ゼミ生のために良かれと思ってしたことが、かえって仇になってしまいました。

自分自身の気付き、反省が多かった今回の森ゼミの発表ですが、TIJの学生たちには本当に楽しい交流の一日になりました。特に日本語の力が高いクラスでは、そこそこで連絡先を交換し、次回の遊びの約束をする姿を目にしました。学生たちが心から楽しんでいる様子を見て、このような活動の機会をできるだけ提供できるように、日本の大学生との連携もさらに進めていきたいと考えた次第です。 北内直子（T I J）

実習コース修了レポート1

大久保里夏

■実習1回目実施後の反省、感想

初めての实習ということで、かなり緊張しました。

伝わったかどうか、理解してもらえたかどうか、よくわからない状態で、終えた感じです。

自分の描いたストーリーどおりの進め方をすることに必死で、みんなの様子を見てのコーラス、ソロの使い方、など、適宜、理解度などの状態を探りながら進めて行くといった対応がなかなか難しかったです。

時間をかければ、理解してもらえるのではないかとはいいますが、30分という時間内に納めなくてはいけないということも、かなりプレッシャーでした。

フリップも、使って示したあとにばらばらに置いてしまって、再度使う際にあたふた探したり、すっきり出来ませんでした。こういう部分で余計な時間を取られない様にすることも大事だと思いました。（CDプレイヤーはまあまあ使えたとは思いますが。）

先生からご指摘いただいた点は、

- ・みんなでコーラスする回数をもっと増やしたほうがよかった
- ・いい形容詞が自発的に出てきた場合など、コーラスで言わせることも必要
- ・スーパーの形容を、学生に自発的に出させるほうがよかった
- ・リアルライフでの「このへんで一番…」についてもっと聞いてもよかった
- ・板書の時には大きな声で。ボソボソ言わないほうがいい
- ・「このへんで…」という言い方についてもうひとつしっかり意味が理解できていないまま先へ進んでしまった感があった

最後の点は、たしかに、授業後、学生の方から「このへんで…は、このそばで…と同じ？」と問われて、先生から、そうです、と補足していただいた記憶があります。

後日、別の学生の方と話していた際、その方は「このへんで…」という使い方を理解はしていました。聞いてわかるものの、まだ自分で使えてはいませんでした。

さらに「このへんで」、は「どのへんまで」を指すのか？など、あまり悩まないように、さっと理解してもらおう方法を更に考えたいと思います。

■実習2回目実施後の反省、感想

1回目に比べ、クラスの方々との交流も深まったので、むしろ、学生の方たちが私を助けるために一生懸命、理解しようとして下さっているのではないかと、という感じがしま

した。

有り難いというか、申し訳ないというか、そんな気持ちがよぎる瞬間もありました。

2回目は、家族の仕事を知ること、個人情報を知っているのか？などちょっとデリケートな内容ではありましたが、事前に先生とご相談させていただいて、色々な職業のフリップを用意しておいたので、とりあえず、モデルケースの言い方は乗り切ることが出来たと思います。

ただ、どちらかという学生の方たちは、ご家族の職業を言いたくても、いまの日本語スキルでは説明できない、という状況だったようです。

内容で一番の問題だったのは、

[職場（主にホワイトカラー）] に つとめています。

[職場（主に工場や店など）] で はたらいています。

という表現の使い分けについてだったと思います。

やはり、「～につとめています」「～ではたらいています」の違いは、もう一つ納得してもらえなかったかもしれない、と反省しています。

先生があとで「つとめています、は、アルバイトのときは使いません」と念を押して下さったので、だいたいイメージは分かってもらえたと思いますが、私たちも明確に分けをしにくい言い回しなので、突っ込んで理由を問われると答えに窮してしまうと思いました。

こういう部分は、後刻、反省会で、先生にご指摘いただいたように、初心者にはきっぱりと限定的な使用方法だけを教えてしまう、ということが大切だと思いました。

また、コーラス、ソロ、ペアなどの使い方も、みんなの進捗を見ながら適宜入れていければ、もっと内容が浸透したと、反省しています。

■教壇実習で得られたこと

教壇実習では以下のようなノウハウを得ることができました。

- ・ 授業の準備はしすぎることはない。授業前に組み立てを念入りにチェックすること。
- ・ フリップなどを使用する際は授業中、また使うことを考えて、乱雑にしないこと。
- ・ 板書する際には書いていることを声に出すといいこと。（特に初級など）
- ・ 教案になくても、理解度にあわせて、コーラス、ソロ、ペアなどをうまく使い、表現の定着を図るとよいこと。
- ・ 早いタイミングで出てくる全体を左右するような基本的な表現については、確実に理解してもらっているか、よく確認してから先へ進むこと。
- ・ 複数の使い方やニュアンスがあるような表現については、受講者のスキルによっては、混乱を避けるために限定的な使い方のみ伝えるほうが良い場合がある。

■まとめ

教室での実習は、大学の音楽実習以来だったのですが、お蔭様で、楽しく、勉強させていただきました。反省点は山ほど有るのですが、気づきとして一番のポイントは、先にも書きましたが、先生にご指摘いただいた、

「場合によってはきっぱり言い切る必要性」
ではないかと思いました。

私は、分かってもらおうとすると、どうも「言い過ぎる」「説明しすぎる」傾向がある
と思います。そこをぐっとおさえて、端的に割り切った表現をする、というのが、一つ
の課題ではないかと思いました。そこに気づかせていただいたことは大きな収穫だった
と思います。

また、これも、先生のお話の中にありましたが、

- ・ 学生さんたち一人ひとりを大人として扱うこと
- ・ 恥をかかせないこと
- ・ 相手に活動してもらうための黒子に徹するということ

という教師の姿勢も、あらためて思い至らせていただきました。

演劇の演出家や、オーケストラのコンダクター、プロデューサーなども、いい芝居をし
てもらいたい、いい音楽にしてもらいたい、と思うときには、良さを引き出すための手
段をいろいろ使います。俳優だったり楽団員だったり気分よく、場合によっては普段
の力以上のパフォーマンスをしてくれるように盛り立てていけるかどうか、という点で
は、実は同じような立場ではないかと思いました。私自身、パフォーマーとして指導を
受けてきてもいるので、教わる側の経験も含めて生かしていければ…と思いました。

最後に、今回、TIJ東京日本語研修所様には、突然のお願いだったのにもかかわらず、
皆様に、快く、また、温かく迎えていただき、本当に感謝申し上げます。

特に、佐々木先生には、お忙しい中、的確、かつ、本当にお優しいご指導を賜り、深謝
申し上げます。お蔭様で、萎縮する事もなく、楽しく勉強させていただくことが出来ま
した。

また、ご無理を申し、他のクラスや文化発表会を見学させていただいたことも、大変勉
強になりました。学生の皆さんのスキルがどのようにアップして行っているものなのか
知ることができましたし、先生方の日々のご努力や優しさ、学生の皆さんとの交流の様
子に触れることもでき、大変な仕事だなあと改めて思ったと同時に、私もぜひ一度はこ
のお仕事をしてみたいと、再確認しました。

面談の折にもお話し申し上げたように、日本語教師になりたいという希望はあるものの、
実習経験が無いことで、なかなか道が開けずにおりましたが、今回の実習を通じ、（も
ちろん、まだまだまねごとでしかありませんが）教室での授業の一端を勉強させていた
だき、今後さらに精進し、活動に活かしていければと思います。

どうもありがとうございました。

実習コース修了レポート2

山田茜

TIJ 東京日本語研修所で日本語教育実習を受けようと思ったのは、日本語教師としてのスキルを身につけなかったからです。

4年制大学の日本語学科を卒業してから、日本語教育とは関係のない仕事をしていたのですが、やはり日本語教師をやりたいと思い転職を決めました。しかし経験がほとんどないため、転職前に実践的な実習をさせていただけるところを探していました。こちらに問い合わせたときは前職に在職中でしたので、実習の期間や日程が個別に相談できたのは非常に有難いことでした。また、実習後は中国で日本語教師をすることが決まっていたため、見学や実習させていただくクラスは、赴任後に私が受け持つ科目や学生のレベル等を考慮してくださいました。本当にありがとうございました。

実習初日、一番はじめに TIJ 東京日本語研修所で目指している言語習得のプロセス、そしてそのために必要な教師の働きを教えてくださいました。実生活では、問題を解決するために「日本語で話す必要性」と「日本語で話したい気持ち」が生まれ、それが発話につながります。授業においても、ただ言わせるのではなく、自分の気持ちと結びつけて、「自分の言葉」として発話させることで、より実践的なものになると教えてくださいました。そのためには、わかりやすく場面を設定し、学習者の気持ちや発想を引き出すことが大切です。私は初級から上級まで様々な授業を見学させていただきましたが、ことばを教えるときには、どの授業でもまず場面や状況を提示していました。

その時は難しく感じませんでしたが、いざ教案を書いてみると、学習者がわかりやすい場面提示を考えるのに苦労しました。私は日本語母語話者ですので、あるひとつの表現を教えようと思ったとき、それを言う状況がいくつか浮かんできます。しかしそれらすべてを詰め込んでしまうと、学習者はただ混乱するだけだと教えてくださいました。場面を設定する際は、その状況に置かれた時の自分の気持ちが、ストレスなく自然と想像できるように学習者の思考の流れを想像しなければいけませんでした。そして、それまでに修得している学習項目とも結びつくような流れを作ると、学習者自らの会話の展開も期待でき、より実践的な授業にすることができます。

また、その提示の仕方にも工夫が必要でした。場面提示に限りませんが、教案を見ていただくと必ずどこかで「これは少し余計な説明で学習者が混乱してしまう」というご指摘をいただけてしまいました。教師の説明が長いと、学習者はその内容を理解するのに意識がいき、スムーズに気持ちが湧いてきません。見学させていただく中でも、初級・上級関係なく、場面は身近で想像しやすいものを非常に簡潔に学習者に伝えていました。見学させていただく際は、その授業の学習項目を事前に教えていただき、自分ならどう教えるか考えていたのですが、先生方の授業を拝見する度に自分の場面提示はわかりづらい、まだまだくどい、と思われました。そして、簡潔でわかりやすい場面提示をすると学習者の発話が積極的になり、とても楽しんで授業に参加するのだと見ていて感じ

ました。学習者と一緒に授業を作り上げていくためにも、はじめの場面提示はとても重要だと学びました。

実習では、先生方のようにできるだけ学習者から発話を引き出し、それをもとに授業を進めていくようにご指導いただいたのですが、実際に学習者を前にして授業してみると、それがどれ程難しいことなのか痛感しました。最初の実習では、学生への問いかけ方が不十分で、授業につながる発話がなかなか引き出せませんでした。1回の授業で複数の表現を教えるので、私の中ではそれまでの内容と切り替えて話を進めているつもりが、学習者の中ではそうはなっておらず、次につながる発話がなかなかでてこないということもありました。教師のたった一言が授業に大きく影響し、たった一言抜かしてしまうだけでも学習者を置いてきぼりにしてしまうのだと学びました。

また、学習者の発話を引き出そうとすると何人もの学習者が同時に話し出すので、それを聞き分けてその中から広げられそうなものや授業に使えるものを瞬時に判断するのも大変でした。先生方はひとりの学習者と会話しながらも教室全体に意識を巡らせていて、発話をキャッチして自然と授業に取り込まれていました。見学という立場だと私もキャッチできるのですが、いざ教壇に立ってみるとなかなかそれができず、ひとりの学習者に気を取られてしまい、せっかくほかの学習者も発話してくれているのに、それがまったく耳に入っていないということが何度もありました。経験の差はもちろんあると思いますが、先生とお話しさせていただく中で、授業を“こなす”ことに精いっぱいにならず、落ち着いて学習者ひとりひとりと向き合って進めようとすることで自然と視野が広くなり、学習者が楽しめる授業を、学習者と一緒に作っていけるのだらうと思いました。

日数にすると15日間という短い期間でしたが、先生方から本当にたくさんのことを教えていただきました。たった2週間でノートを2冊使い切るという経験は初めてでした。先生方のように、時間が経つのがあっという間に感じるような楽しい授業を、学習者と一緒に作り上げていけるようになるのが今の私の目標です。ことばにすると単純に聞こえますが、これがどれだけ大変で、どれだけ複雑か、実習を通して思い知らされました。学期末という、先生方にとっても学習者の皆様にとってもお忙しいこの時期に実習させていただき、そして熱心にご指導くださり、本当にありがとうございました。先生方から教えていただいたことを忘れず、今後活かしてまいります。

大学生の教育実習修了レポート1

田上信輔（獨協大学）

私は、元より日本語教師を進路の選択肢の一つと考え、大学で日本語教員養成課程（副専攻）を受講していましたが、TIJでの教育実習を通して、以下に述べる二つの、いままででない大きな気づきを得ることができました。

一つ目の気づきは、「学習者がどうすれば日本語を話せるようになるのか」という問いへの答えです。私はこの問いに対して、実習前は、「内的動機づけを持ってもらえば

良いのではないか」といったような、漠然として、机上論に過ぎない答えしか持っていないませんでした。ですが、TIJ の先生方の授業を見学したり、先生方の指導のもと自ら TIJ 式の授業を実践したりする中で、学習者との対話を通して、ある文型の実生活における必要性に気づかせ、それを使いたいという気持ちを起こさせるのが、学習者の日本語上達の鍵なのだと気づきました。さらに、この一連のプロセスの中でもとりわけ重要だと感じたのが、「対話を通して」という箇所でした。言葉は違っても、同じ人間ですから、まずはお互いに信頼関係を築かなければ、授業内容も何も伝達することはできないでしょう。このことは、教壇実習をした時に、いい意味で体感できました。というのは、こちらが心を開き、真摯に学習者に向き合えば、彼らはおのずから、日本語で応えてくれることがわかったからです。以上のことを最重要課題と位置づける TIJ の教育方針の有効性を、楽しみと共に身をもって知ることができ、良かったです。

二つ目の気づきは、徹底した授業準備の必要性です。一口に「学習者に日本語で話したい気持ちを起こさせる」と言っても、それを実現するのは簡単ではないということが、教壇実習を準備する中でわかりました。教案指導で何度も指摘されたのは、「教師がこう言ったら、学習者は何と答えるかをよく想像し、教案に書き入れよ」ということでした。例えば、迷惑の受け身の文型を導入する時、学習者に最近あった迷惑なことを聞いても、厳密に言えばその文型に適さない経験（例：注文に一度にたくさん来られて、嫌でした。）を話すことが十分に考えられます。その場合教師に求められるのは、どうにかして学習者に、教師が言わせたいことを言ってもらえるよう誘導することですが、その方法も含め予め考えておかないと、授業本番ではうまくいかないでしょう。実際に、教壇実習では何度かそのようなことが起こり、事前の想定不足から、不自然な表現を学習者から引き出してしまい、授業のコントロールの難しさを痛感しました。その点、TIJ の先生方は、巧みに学習者から多彩な経験や意見を聞き出せていて、それは豊富な経験と、何より日頃から築いた学習者との信頼関係の賜物なのではないかと思いました。

以上が、TIJ での実習で得られた気づきでした。これらは、今後日本語教育に関わって行く際、大いに役立つでしょう。最後になりますが、お忙しい中、様々な指導をしてくださった、広瀬先生、阿字地先生、佐々木先生をはじめとする TIJ の先生方、そして私を暖かく出迎え、見守ってくださった TIJ の学生の皆様には、心から感謝申し上げます。色々至らない点があったとは思いますが、皆様の支えのお陰で、非常に多くのことを学べました。この経験は、一生の宝物です。

大学生の教育実習修了レポート2

古川祥生（獨協大学）

今回の実習で初めて日本語教育の現場に入り、たくさんの学びや発見がありました。2週間、初級から上級までたくさんのクラスを見学した中で、1番面白かった点はそれぞれのクラスの色です。クラスごとに学生の国籍が様々で、それによって先生方の授業内容に工夫したり、クラスの進め方に気をつけていたり、先生方の工夫が詰まった授業でした。そのため、どのクラスをみても楽しく見ることができました。日本語を与える

というイメージでしたが、実際は学生から日本語を引き出し、学生の国の情報もみんなで共有することのできる、活気溢れるクラスであることがわかりました。また、先生方の工夫から、自分自身の実習にすぐに生かされる点は生かそうと思い、大変勉強になりました。

私自身の実習に関して、1番不安だったことは教案作りです。大学の模擬授業で教案を作成する際、導入部分をいかにナチュラルにわかりやすく作成できるか、どのように始めようか、と言う点でたくさん悩みました。授業見学をする際は、特に導入に注目してメモを取り、先生方がどのようにされているか気をつけて見るようにしました。T I Jでは、独自のテキストにのっとなって教案づくりと授業が進められていたため、課の内容にそって導入部分を考えることができました。また、担当の佐々木先生の優しく丁寧な教案指導により、自信のなかった教案も授業ができる内容に持っていくことができました。少しでも学生と近い距離で授業を円滑に進められるように、休み時間は実習をするクラスの学生とお話しようと心がけたところ、実際の授業では学生の皆さんが協力してくれたため、スムーズに授業が進みました。私自身、1回目の実習ではとても緊張してしまい、心に余裕なく授業を進めてしまいました。2回目は自分の中の反省と、田上さんの授業を見て感じたことを意識しながら、落ち着いて授業を進めることができたとおもいます。学生からも、2回目の方が良かったよとのお言葉をいただいたため、達成感がありました。絵カードを作ることが好きな私に、導入部分で使う絵カードを作るという提案を受け入れてくださった佐々木先生のおかげで、補助教材準備も楽しみながら行うことができました。

最後になりますが、一緒に勉強をさせてくださった学生の皆さん、丁寧に教案指導をくださった佐々木先生、授業見学をさせてくださった先生方、そして温かいお言葉や心遣いをしてくださったT I Jの先生方に、心から感謝申し上げます。至らない点ばかりだったと思いますが、優しく親切な先生方のおかげで、とても充実した実習期間を送ることができました。来春からは、日本文化に常に触れられる環境に身を置くことで日々学び続け、将来はT I Jで学んだことを生かしながら日本語教育に携わりたいと考えております。私にとって大変貴重な二週間になりました。本当にありがとうございました。

お知らせ

T I J、法務省新告示基準適合校に指定される

在留資格「留学」が付与される留学生を受け入れることが可能な日本語教育機関は、法務省入国管理局が定めた「日本語教育機関の告示基準」を満たしていることが求められています。

新基準は、平成28年7月22日に公示、平成29年8月1日から施行され、T I Jは告示基準に適合した日本語教育機関として、別表第一に掲載されました。

別表第一は下記から見られます。T I Jは6ページ目にあります。

<http://www.moj.go.jp/content/000107266.pdf>